

# Accountant's magazine 36

会計プロフェッションのヒューマンドキュメント誌  
[アカウンタンツマガジン]  
June 2016 vol. 36



Biographies of Great Person  
会計士の肖像  
渡辺公認会計士事務所  
税理士法人優和  
**渡辺俊之**

Office Scope  
事務所探訪  
税理士法人みらい  
コンサルティング  
The Accounting Department  
経理・財務最前線  
**BEENOS株式会社**

The CFO  
ニッポンの最高財務責任者たち  
デジタルアーツ株式会社  
取締役 管理部 部長  
**赤澤栄信**

Accountant's magazine June 2016 vol. 36

2016年6月1日発行(隔月刊) 発行人/黒崎 洋 編集人/安島洋平  
発行・販売/ジャスネットコミュニケーションズ株式会社  
〒102-0083 東京都千代田区麹町2-10-9 C&Rビル1F TEL:03-4550-6629

定価 515円(本体477円)

公認会計士2万8,286人、  
税理士7万5,643人——。

10万3929人の会計人が日本の  
400万法人の経営を支えています。  
私たちジャスネットコミュニケーションズは、  
会計プロフェッションを支える  
プロフェッショナル・エージェンシーです。

ジャスネット 検索

## ジャスネットコミュニケーションズ株式会社

東京本社 〒102-0083 東京都千代田区麹町2丁目10番9号 C&Rグループビル1F TEL 03-4550-6629  
関西支社 〒542-0081 大阪府大阪市中央区南船場3丁目5番8号 オーク心斎橋ビル8F TEL 06-7711-7000  
名古屋オフィス 〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南1丁目3番18号 NORE名駅3F tohkaie@jusnet.co.jp  
www.jusnet.co.jp

ジャスネットコミュニケーションズは、「プロフェッショナル・エージェンシー」クリーク・アンド・リバー社のグループ会社です。  
C&Rグループ 株式会社クリーク・アンド・リバー社(東証2部4763)、株式会社メディカル・プリンシプル社、株式会社リーディング・エッジ社、株式会社C&Rリーガル・エージェンシー社  
株式会社インターベル、株式会社プロフェッショナルメディア、CREEK & RIVER KOREA Co.,Ltd. CREEK & RIVER SHANGHAI Co.,Ltd.

プライバシーポリシー: ジャスネットコミュニケーションズ株式会社は、個人情報保護を適正に取り扱っている事業者として、(一財)日本情報経済社会推進協会よりプライバシーマークの付与認定を受けています。



Accountant's magazine  
**CONTENTS**  
June 2016 vol. 36

**Staff**  
発行人/黒崎 淳  
編集人/安島洋平  
編集デスク/小山満也、出村勇樹、中村 陽  
編集ディレクション/菊池徳行(株式会社ハイキックス)  
デザイン/RuffGong DesignStudio  
本誌掲載の写真、記事などコンテンツの無断転載を禁じます。  
©JUSNET Communications Co.,Ltd

**Accountant's Opinion Part2**  
vol. 14

東芝問題は終わってはいない。  
学ぶべきことはまだまだある

青山学院大学大学院 会計プロフェッション研究科 教授・博士

**八田進二**

2

**Biographies of Great Person**

**会計士の肖像**

「面白そうだ」との直感を信じ、  
様々な挑戦をし続けてきた。  
「好奇心+会計」のベースが  
引き寄せてくれた充実人生

渡辺公認会計士事務所 / 税理士法人優和

**渡辺俊之**

4

**Office Scope**

**事務所探訪**

vol. 29

自由と自律を仕事の軸とし、楽しめる業務に  
本気で取り組む。従業員満足を最優先しながら、  
働きがいナンバーワンの事務所に

**税理士法人みらいコンサルティング**

12

**The Accounting Department**

**経理・財務最前線**

vol. 28

チームメンバー全員が、グループ各社の  
将来利益を拡大するCFO的役割を担う

**BEENOS株式会社 財務経理室**

14

**The CFO**

**ニッポンの最高財務責任者たち**

vol. 28

数字を読み、対話を増やし、  
会社が目指す未来へ  
最適かつ最短距離で導く

デジタルアーツ株式会社 取締役 管理部 部長

**赤澤栄信**



16

**Challenge for the New World**

**熱き会計人の転機**

vol. 4

監査業務とは180度異なる顧客に結果=利益を  
もたらす仕事。成長できる“上り坂”も心地よい

ペイン・アンド・カンパニー・ジャパン コンサルタント

**長濱賢吾**

20

**22 Accountant's magazine**  
バックナンバーのご案内

**Accountant's**  
*Opinion Part 2*  
第14回

構成 / 南山武志

東芝問題は終わってはいない。  
学ぶべきことはまだまだある

不正会計問題に揺れた東芝は、問題公表後1年を経て、どうにか過去の人脈を断ち切るための新社長を選任し、新たなスタートを切るようである。昨年7月に3人の歴代社長が退任した後を継いだ室町正志社長は、当初から、その適格性に多くの疑問が投げかけられていた。そもそも問題発覚後、社内に設けられた「特別調査委員会」の責任者を務めながら、任務を完遂できず、結局社外の第三者委員会に調査を委ねざるをえなかった事実からも、リーダーシップの欠如は明らか。加えて、実質的に彼を社長に据えたのが、不正会計期間中も隠然たる影響力を有していた相談役であったということにも、多くの批判が寄せられた。そうした点を鑑みれば、今般の社長交代自体は当然のことだと思ふ。しかし、長年にわたり「長老支配」の下で醸成された内部統制の機能不全といった悪しきDNAを払拭し、新たなスタートを切れるのかは、いまだ不透明と言わざるをえない。

いずれにせよ「東芝問題」については、今後も注視する必要がある。致命的だったのは、鳴り物入りで設けられた第三者委員会の報告書が、問題の真因究明に至らず、まったく期待外れの中身に終わったことだ。大きな問題は2つあり、1つは会計監査人のかかわり方に対する記述が一切ないこと。「組織的かつ綿密な調査が必要」だから評価はしない、というのは第三者委員会としての責任放棄とも受け取られる。2つ目に、2006年の原子炉プラントメーカー、米国ウエスチングハウス買収の一件も、300ページの報告書のどこを探しても見当たらない。巨額の減損が必要と言われている「のれん代」や、繰延税金資産に関する計算根拠についても不透明感が払拭されておらず、不信感のみが増幅した

報告書であった。そもそもこの「第三者委員会」という仕組みは日本発のものであって、海外には存在しない。ルーツは1990年代末の「長銀事件」である。経営破綻した日本長期信用銀行の経営陣がその責任を問われた裁判の際、「外部委員会」が「経営責任なし」の結論をまとめ、最高裁で無罪判決を勝ち取る大きな力になったのだ。以来、企業が何か問題を起こした時に、外部の専門家を巻き込んでまず真相究明を行い、それをもとに是正に向けた提言を受けるという「自浄能力発揮」のスキームが出来上がっていったのだ。

ただ、昨今流行の第三者委員会の大半は、不祥事企業が自浄能力を発揮せずに、外部の者に丸投げして安易に解決を図るために設置されているようである。「第三者」といながらも、独立性のない人物が委員に名を連ねたり、「調査費用」についての開示も一切ない。一番問題なのはそのメンバー構成で、不祥事例の多くが不適切会計に関するものでありながら、適任な会計士の関与は少なく、必ずしも会計知識に精通していない弁護士や税理士の独占に近く、まさに法曹界のビジネスになっているのである。

話を東芝に戻そう。問題の背景には、「とにかく利益」という経営者の思いを下の人間が忖度し、不正に手を染め、踏襲してしまったという企業体質があった。わが国を代表する著名企業として、誰もが過去の成功体験から脱することができずに、刷新の機会を逃してきてしまったのである。それは日本の経済界に共通する病理現象なのではないか。学ぶべきことはまだまだたくさんあるはずだ。その意味で、東芝問題は終わってはいない。

慶應義塾大学大学院商学研究科  
博士課程単位取得満期退学。  
博士(フロンティア)会計学 青山学院大学。  
2005年より現職。  
現在、日本内部統制研究学会会長、  
金融庁「会計監査の在り方に関する  
懇談会」メンバーを兼務し、  
職業倫理、内部統制、ガバナンスなどの  
研究分野で活躍。



青山学院大学大学院  
会計プロフェッション研究科  
教授・博士  
**八田進二**



「面白そうだ」との直感を信じ、  
様々な挑戦をし続けてきた。  
「好奇心＋会計」のベースが  
引き寄せてくれた充実人生

Biographies  
of  
Great Person  
会計士の肖像

vol. 35

Toshiyuki Watanabe  
渡辺公認会計士事務所  
税理士法人優和

渡

辺

俊

之

取材・文／南山武志 撮影／大平晋也

# 名門ゼミの一員となるも、就活に苦戦。会計士を目指す

「公認会計士は監査専門」というのは、かつての話。だが、渡辺俊之のように、「現場主義」を貫く監査、経営者に寄り添う税務、企業コンサル、行政監査、上場企業の社外監査役という都合、5つの顔を持つプロフェッショナルとなると、唯一無二の存在といっているのではない。「私には、悠々自適の老後は似合わない」と語る71歳にしてこの多面的業務展開の原点をたどると、大学卒業後に独学でチャレンジした公認会計士資格取得に行き着く。

生まれたのは、終戦の前年、1944年です。プロフィールが「埼玉県行田市生まれ」になっているのは、母の実家であるそこが、親の疎開先だったから。戦争が終わると東京・中野に移り、私が小学校に上がった50年には、港区芝三田台町（現在の三田）に居を構えました。

東京のど真ん中といっても、当時は原っぱあり、せせらぎあり。セミやバツタやザリガニを取ったり、寺の墓場でチャンバラごっこをしたり少年時代でした。東京タワーが建っていくのを見ていましたから、まさに『三丁目の夕日』の世界なのですが、実は私は

今も三田に住んでいるんですよ。周囲にお寺が多くて、結果たび重なる再開発を免れた。幼なじみは、一人残らず引越してしまっただけですけどね。

都立九段高校に進むと、打ちこんだのが卓球です。といっても、技術はいまひとつ。得意はトレニングのランニングやうさぎ跳びで、いつも一番だった。30歳くらいから風邪ひとつひいたことがないのは、あの時培った体力のおかげかもしれません。

大学は早稲田の第一商学部に通いました。なぜ商学部かといわれても困るのだけど、なんとなく数字が好きだった。余談ながら、母親は生真面目な人で、子供の頃から「金銭出納帳」をつけないと、小遣いをくれない（笑）。この前、中学時代以降の「帳簿」がごっそり出てきたんですよ。見たら、「ブル代30円」「アイス5円」とか、それは几帳面に書いてあるわけです。もともとそういうのがあまり苦にならない性分だったのでしょう。

大学3年になり、ゼミの選択を迫られた時、憧れたのが、会計学の大家と称される染谷恭次郎教授の教室である。だが、「入門」を許されるのは、限られた成績上位者のみ。「とても無理だ」とあきらめかけていた渡辺だったが、幸運は意外な形で舞い降りる。時代は60年代半ば、折しも学園紛争が盛

## 勃興期の監査法人へ。「教科書」と違う現実を学ぶ

71年4月、渡辺は監査法人千代田事務所（後の中央青山監査法人）に入所する。上場企業の組織的監査を目的とした監査法人制度自体、4年前の67年にできたばかり。そんな時代だった。

事務所を設立した7人の会計士が、それぞれ6、7社のクライアントを抱えて飛び回っていました。新人りはその補助をするわけですが、とにかく実務を覚えるのに無我夢中で、「自分たちが新しい時代の監査を担うんだ」とど肩に力を入れる余裕はゼロ。でも、見ること聞くことすべてが新鮮で、仕事は楽しかったですよ。

特に教科書で習ったことが現場で生のデータとして見られるのは、面白か

り上がるなど、大学内部にもいろんな意味で変革の機運が横溢していた。そんな空気を反映してか、染谷ゼミもその年から受講資格を緩和し、間口をやや広げたのである。

「ぜひ先生のゼミで勉強させてください」と直談判の手紙を書いたら、「参加していい」と。まあ、喜んだのも束の間、入ってみると周囲の水準の高さに圧倒されるばかりでしたけど、染谷先生の授業から得るものは、とても多かったですよ。

4年生になるのは、あつという間。今度は就職活動です。俊才揃いのゼミの同級生たちは、金融機関や商社などの超一流会社にどんどん決まっていますね。しかし、同じ「染谷ゼミ生」でありながら、成績に少々難ありの私には、これはと思う企業からなかなか色よい返事がもらえない。

「会計士の資格を取ろう」と本気で考えたのは、この時期でした。数字は嫌いではなかったし、資格を取ってバリエーションの先陣もいるし、と。どこか拾ってくれる会社があったなら、喜んでそちらに行っていたでしょうねえ。思い返してみると、あそこは人生の大きなターニングポイントでした。

ともあれ、決めたからにはできるだけ早く会計士試験に受からなければなりません。でも、当時は受験の専門学

だった。「標準直接原価計算」なんていうのが、実務として目の前で行われているのに遭遇すると、感動的できえありませんでした。

同時に、「教科書との違い」も痛感させられましたね。例えば間接費の配賦について、教科書的にはわりとさりと触れられているだけに、企業によっては、ものすごいボリュームの書類を用意するわけですね。ここにこんなに労力や時間をかけるのは無駄ではないか、と思えるほど。しかしそうではなくて、そこが経営に必要なデータなのだということがわかってきたのは、それなりに経験を積んでからのことです。

とにかく、世の中には多種多様な「生きた」会計事象があるのだということが、監査の仕事を通じてよく理解できましたよ。その一つひとつについて、先輩たちに交じて真剣に議論もしました。クライアントの経理や財務などにも、当時の私などよりはるかに知識と経験を持った人が数多くいて、逆に勉強もさせてもらいました。そうやって、徐々に会計士としての考え方の基礎を身につけていったわけですよ。

●



27歳の時、妻の美子さんと結婚。海外への新婚旅行から帰国すると、顧客が倒産しており、その後は午前様続きの激務が続いたのだそう



早稲田大学第一商学部を卒業後、公認会計士第二次試験に合格。合格祝賀会での記念写真



若い頃からスキーをたしなんできた。最近も4年連続で友人たちと海外スキーに出かけている



高校は都立九段高等学校に進学。卓球部に在籍し、活躍した。技術よりも体力で勝負するタイプだったのだそう



9歳の頃、東京港区三田の実家にて。妹の直美さん（左端）、裕子さん（中央）と



1944年、渡辺家の長男として、母方の実家の埼玉県行田市で産声を上げる

### 会計士の肖像

# History of Toshiyuki Watanabe

~20代 (～1970年代)



好奇心が強く「新し物好き」の渡辺氏は、早くからIT機器を使いこなしてきた。写真は常に持ち歩く、「Apple Watch」「iPhone」「iPad」。インターネットとIT技術をフル活用しながら、仕事と遊びの両立に役立っているようだ

は、よかつたのだが……。

帰国して新聞を広げて、びっくり。クライアントだったある企業が倒産したのみならず、決算に不正があったのではないかと、取りざたされる事態になつていたんです。携帯端末で、どこでもニュースが見られるような時代じゃないですからね、戻ってきたらいきなり天国から地獄です。

翌週からは新婚生活どころか、連日の午前様状態。膨大な会計資料をひっくり返して、不正の痕跡を洗いわけです。どうやら悪さを働いたのも会計士資格を持つ経理部長だったらしく、簿外の手形の振り出しとかの口口が巧妙で、それは大変な作業だったことを記憶しています。まあ、地検特捜部みたいな仕事は、私自身にとってはエキサイティングでもあったのですが、当然のごとく妻には大いに呆れられました。

当時の仕事で印象に残るものといえば、建設現場の実査・立会にも驚きましたね。建築途中の建物に上って、内部を検証するわけですけど、足がすぐむような高さ。ここから落ちたらどうするんだ、と(笑)。

ただ、そんな経験もしながら「現場に行くことの大切さ」を体に染みこませることができたのも、あの時代に得た大きな収穫でした。建設現場にしろ

棚卸にしろ、実際に足を運んでヒアリングすることによって、帳簿だけではわからない部分が見えてくる。あちこち現場を見ることによって、「この会計事象にはこのあたりに問題がありそうだ」とイメージできるようになるのです。そこが会計士にとって大事なポイントでもあるし、強みにもなる。この信念は、今も変わりません。

私は今でも、森林を実査するために、ヘルメットに長靴で道なき道を分け入ったりするんですよ。歳を考えて、危険なことからはそろそろ引退しないとけない、とも思うのだけどもね。

### 独立し税務に携わる。 やがて 共同事務所を設立

75年、前年に公認会計士第三次試験に合格し、監査法人内での役割もいよいよ重きを増そうかというタイミングで渡辺は退所し、個人事務所(渡辺俊之公認会計士事務所)を設立した。以来、自身が監査専門・監査・税務兼業↓税務専門・監査に傾斜↓再び税務・監査兼業——と個人史に記すような「事業履歴」を重ねていくことになる。入所4年目、ちょうど30歳の決断の動機は、何だったのだろうか。

もともと飽きっぽい……という語弊がありますね(笑)。基本的に、新

し物好き。なんです。私は。何か面白い仕事ができそうになると、あまり迷うことなくそっちに行く。監査の仕事は楽しかったけれど、つまるところ他人の行為の検証で、あんまり創造性がないのかな、コンサルティングサービスなんていうのも面白そうだな、という気持ちも芽生えてきて。要するにそろそろ違うこともやってみたいと思

ったのが、転身の一番の理由です。とはいえ、食べていかななくてはなりませんからね。個人でもできる税務の仕事を始めると、引き続き補助者の立場で監査法人の監査業務を手伝わせてもらいました。

次に転機が訪れたのは、39歳の時でした。私と同じように千代田事務所を辞めていた京都の先生から、「会計士の共同事務所をつくらう」と声がかかったんですよ。「若い人間を集めて、既存の監査法人とは違う何かをやらないか」と。面白そうじゃないですか(笑)。そこで、東京側の事務所の取りまとめを引き受けました。結局、東京、京都、大阪、名古屋のほか福岡、札幌などの会計士も加わって、総勢19事務所「優和公認会計士共同事務所」を設立したのです。

このタイミングで法人の監査業務からは退き、新たな取り組みに完全にシフト。そして「今までの監査法人にない組織」構築に向けてアイデアを出し

合、研修なども始めました。

ところが、仕事というものは、往々にして予期せぬ方向に転がっていくものです。共同事務所をつくった80年代半ば、「一人医療法人制度」ができて、その設立ラッシュが訪れたり、事業承継対策が切実なテーマになったりと、税務関連の案件がどんどん増えただすよ。気づいたら業務は税務オンリーになっていったのです。

独立して以降、税務でもいろんな経験をさせてもらいましたね。最初の十数年は、税務申告書も自分で作成していました。手書きだから朝の6時頃起きてやらないと間に合わない。ずいぶん苦労したけれど、後から考えると、それで税務を覚えたようなものです。上場企業の監査と違い、税務で向き合

うのは、中小企業の経営者。中には、明日にも首を括つちやうんじやないかというような苦境の人もいて、文字どおり苦楽を共にする感覚です。彼らからは税金問題に限らず経営のあれこれについて、とにかく頼りにされる。親身になって頑張っていると、役に立っていることが実感できる。そこが、税務の仕事のやりがいですね。

「このまま税務中心で行こうか」と考えていた渡辺だったが、ある時、「補助者ではなく責任者ならば、監査もいいな」と気持ちは動く。大きなきっかけは、95年から日本公認会計士協会の理事を務めたことだった。

最初は「とても時間は割けない」と

断ったんですよ。ところが、その後、東京会の副会長になった繁田勝男先生に夜中まで説得され、結局OKしました。考えてみたら、協会の理事がどんなものなのかは、やってみなければわからない。ここでも「とにかく挑戦してみよう」の精神が勝ったわけです。

結果的に、その判断は「当たり前」でした。ほぼ10年間、監査から遠ざかっていたけれど、理事になったとたん、最新情報が入ってくる。会計監査というものが、いかに経済社会の重要なインフラであるかを、再認識させられました。プランクがなかったら、あんなに新鮮な気持ちになれたかどうか。

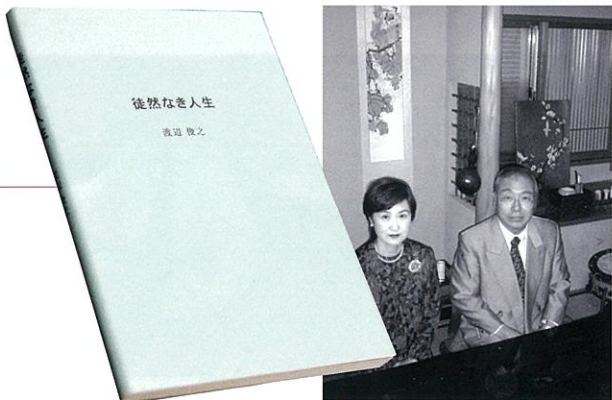
ともあれ、そうなるに会計士としての血が騒ぐというか……。50歳という年齢を考えても、もう一度監査をやる



現場に行き話を聞けば見えないものも見えてくる。会計士にとってそれが大事。そして強み



カラオケ大好き人間で持ち歌は100曲以上。銀座のカラオケスナックにて。得意のナンバーを熱唱



事務所開設30周年と自身の還暦を迎えたタイミングで、それまでの人生を振り返り「徒然なき人生」という冊子にまとめた。右は、60歳の時、美子さんと自宅で撮影した写真。冊子の冒頭に掲載されている



様々な考えを訴え続けたことで、テレビにも5、6回出演し、そのほか雑誌など様々なメディアから声がかかった。自分の主張が世の中を変えているという実感が、仕事のやりがいにつながっている



東京青年会議所経営委員会 昭和56年1月24日 於 箱根小涌園  
その後の展開の基盤となった。経営委員会・委員長時代、箱根小涌園で親睦会を開いた際の一枚



長女・路子さん、長男・俊介さん、2人の子宝に恵まれた。父・保平さん、母・文子さんとの家族写真

## 会計士の肖像 History of Toshiyuki Watanabe 30代~60代 (1980年代~2010年代)

なら今しかない、またしても方向転換を決意したのです。

最初のクライアントは、労働組合でした。その後、公益法人、大学、金融機関など、徐々にお客さまの裾野が広がりました。ただし、自分だけでなく抱えることはできません。学校法人の監査だったら誰、金融機関は彼というふうには、知己の会計士と組んで仕事をすることが多かったですね。うまくやれたのは、そういう仲間たちがたくさんいたおかげでもあります。

この連載に登場された歴代の先生方と違い、私は大きな事務所を率いる組織的な拡大志向はありませんが、誇れるものがあるとしたら、公益法人に関するには誰にも負けないという自信です。3分冊、3000ページのポリウムの実務本（加除式『一般・公益社団・財団法人の実務』新日本法規出版）の執筆・編集に中心にかかわったり、政府系委員会の委員をさせていただいての人脈の広がりがあったり。そんな地歩が築けたのも、この頃取り組んだ仕事のおかげなんです。公益認定作業は本当にたくさんやらせていただきました。

### 楽しみながら、40代、50代と同じ仕事量をこなす

2004年、会計士協会理事を任期

つめ直してみると、我ながらよくやるなあ、とは思いますが。仕事量は50代の頃と比べ、実感として変わっていないし、最近、自分の確定申告の数字を「数字的」に、60歳代以降も、まったく落ちていなかった。

大学の仲間が一流企業に行った人たちで社長になった人も、60代後半にリタイアして悠々自適の人生を送っています。年に何十日も海外旅行に行っているなんていう話を聞くと、羨ましくもありますね。でも当面、私には無理でしょうね。70歳を超えても現役でいられることを、素直に感謝したいと思います。今が楽しいんですから。

最初にも話したけれど、大学時代の成績がもう少しよかったですら、私はここにはいないでしょう。そうじゃなくて幸運だったな、だからこそ会計士になれたんだ、とつくづく思います。半世紀も昔のことに負け惜しみを言っても仕方ない、これは本心ですよ（笑）。



### Profile

1944年11月30日 埼玉県行田市生まれ  
1968年3月 早稲田大学 第一商学部卒業  
1970年10月 公認会計士 第二次試験合格  
1971年4月 監査法人千代田事務所(後の中央青山監査法人)入所  
1974年8月 公認会計士登録  
1975年4月 渡辺公認会計士事務所設立  
1984年2月 優和公認会計士共同事務所(現優和会計グループ)設立  
2004年4月 税理士法人優和設立  
家族構成=妻、息子1人、娘1人、孫5人

業界活動など  
日本公認会計士協会常務理事、自動車リサイクル法:資金管理業務諮問委員会・委員、前田建設工業株式会社・社外監査役、港区包括外部監査人、公益財団法人ニッセイ文化振興財団(日生劇場)監事、一般社団法人全国清涼飲料工業会監事、公認会計士福岡会会長ほか多数  
主な編著書  
『伸びる会社のズルいお金の使い方』(幻冬舎)、『加除式 一般・公益社団・財団法人の実務-法務・会計・税務-』(新日本法規出版)、『加除式 不動産有効活用の実務と対策』(第一法規出版)、『Q&A公益法人の運営と会計・税務』(新日本法規出版)、『Q&A中間法人の設立・運営の実務』(新日本法規出版)ほか多数

満了で退任したのと前後して、渡辺は監査業務のウエイトを高めながら、独立直後と同じ税務・監査兼業へ傾斜していく。そこには多様な税務知識と、監査で得た幅広い知識、経験が上乗せされていた。同じ年、税理士法人制度のスタートという流れに乗って「税理士法人優和」を設立、理事長に就いた。

● 私たちの税理士法人は、会計士共同



事務所と同じように、各地の事務所が統合するあたりに設立されました。現在は、東京、京都、茨城、埼玉の4拠点を体制で運営しています。

全国展開していると、大きくなった会社の業務を連結納税などで分担することもできる。各拠点の成功例、失敗例といった生の情報を共有できるのもメリットだと感じます。それぞれの事

『下り坂会計士のマルチ人生』。渡辺自らのブログのタイトルだ。下り坂かどうかは置くとして、どこまでも多彩に、複眼的に生きようという意志が、そこには込められているのだろう。今目指しているのが、「遊びを仕事にすること」。どうやらこれも、ただの言葉の遊びではないようだ。

● 私のお昔からの将来的課題は、「遊びながら仕事をし、仕事をしながら遊ぶ」なんです。仕事一筋ではつまらないし、長続きもしないでしょう。週末もなれば女房と一緒にあちこち旅行したりするし、海外スキーも続けています。ただ、いかにせん現役なので、実に忙しい。仕事か遊びかどちらかを我慢すれば、生活にずいぶんゆとりが生まれるとは思うのだけど（笑）。そこで考えたのが、遊びを仕事にすればいいじゃないか、ということ。私は15年ほど前に沖縄の唄三線に出

務所によって経営のスタンスは違うので、無理やり文化を統一しようといった考えは、毛頭ありません。幸い今はネットやスカイプという武器がありまから、それを活用して月1回のテレビ会議や統一Web研修会をやったり、年に2回は幹部が顔を突き合わせて懇親を深めているんです。

● 今現在の私の業務比率を労働時間で考えてみると、監査が3割、税務4割、企業などのコンサルティングが2割、といったところでしょうか。残りは、行政監査と社外監査役の仕事に費やしています。行政監査というのは、具体的には港区の包括外部監査人です。区の清掃事業などについて公会計の立場から監査を行い、効率化に向けた提言を行うわけですね。従来メスの入りにくかった分野に切り込むわけですが、それだけに、世間にインパクトを与えられることができる。これもほかにはない面白い仕事です。

また、社外監査役としては、1部、2部上場会社を数社担当しています。ここでは、やはり座学ではわからない経営の意思決定過程や、巨大組織への浸透方法等、コーポレートガバナンスの現実に触れられるのが醍醐味です。いったい企業経営者はどうやって企業統治を行おうとしているのか？ そもそも理想のガバナンスとは、どういうものなのか？ こうしてあらためて見

● 会って、すっかりハマってしまった。恥ずかしながら会計士協会の音楽祭にも出ました。弾き語りの合間に「沖縄の経済特区に会社をつくらう」なんてお遊びの講演をするわけです。そんなことをやっているうちに、沖縄でのクライアントもできました。

● スキーも趣味で、つい最近も4年連続で、1週間ほど休みを取って、昔からの仲間たちとフランスのトゥロワバレーやら、マッターホルンを踏破したんです。山岳地帯を一日60km以上滑って越えていくのです。そんななかでも、パソコンがあればスカイプで秘書と直接やり取りできる。休暇中の海外からテレビ会議に出席することも珍しくありません。部下たちは嫌がっていませんけどね（笑）。そういうふうには、仕事も遊びも渾然一体、前向きに楽しむわけです。

● 若い人たちに一言、ですか？ 啓発し合える仲間を持つこと、そして「俺はこの仕事はやらない」というのはなくて、何にでもチャレンジしてほしい、ということでしょうか。

● 私の座右の銘は、「未見の我」です。人はみな、自らの能力に気づかず生きているんです。今までは違う新たな大地に立った時、初めて「まだ見ぬ自分」と出会うことができるんですね。

※本文中敬称略



お正月、最愛の家族たちと自宅にて。5人の孫たちに囲まれた渡辺氏。最高の笑顔



週末に地方出張が入ると、美子さんを伴いその近辺を旅行している。九州出張の際に、長崎の平和記念像の前でポーズ



渡辺氏は長く公益法人の監査・指導に携わり、多くの実務書作成を手がけている。手前の緑の表紙は近著『伸びる会社のズルいお金の使い方』(幻冬舎)



2014年に友人たちと滑りに訪れた、マッターホルンの麓ツェルマツスキー場にて



日本公認会計士協会東京会が主催した「第1回及び第3回東京会音楽祭」。渡辺氏もステージに立ち、沖縄音楽を披露した



50代中盤から沖縄三線にはまり、和と三味線も趣味となった。向島の料亭で三味線の弾き唄いをする渡辺氏

### 会計士の肖像

# History of Toshiyuki Watanabe

60代~ (2010年代~)